



昭和初期、金田駅前には旅館が6軒あり、30年代まで大阪・京都・富山などの商人がここを定宿にして、筑豊での営業に回った。金田駅の玄関口から見た和と洋を感じさせる正面の建物は1階が歯科、2階がダンスホールというモダンな造り。

大正2年、将来への展望を示すかのように、金田商店街の一角に明々と電灯が灯りました。その翌年の大正3年には商店数が350軒にも達します。このころ、金田駅と商店街を中心に、県道などの主要道路が東西南北へと発達。大正11年には宝見橋が架設され、早くも現在のような交通網が形成されたのです。

当時、庶民の最大の娯楽だった映画。その千人規模の収容力を誇る上映館「敷島座」と「大和館」が商店街に館を構え、人気映画の際には、チケットを求め人の列が、金田小学校付近まで100m以上も伸びたといわれます。商店街の灯は夜の上映が終わわり、最終列車が出るまで消えることはありませんでした。繁華街を形成した敷島町は、夜のとほり降降りるころから明け方まで、不夜城

### 奉仕市発祥の地

庭園に滝や築山が配置され、田川地区で一番の高級料亭と噂されました。立派な正門前には高級車が横付けされ、100畳敷きの大広間では連日のように宴が催されていたといえます。

金田魚市場からは威勢のいい声が響き、多種にわたる行商では、塩の売り子や富山の薬売りも荷を背負って街中を回っていました。

このように、今では想像もつかない状況をみせた創業時の金田商店街は、訪れる人を快く迎える気風とともに、やがて「お客様第一」の精神をはぐくんできています。

往時の商店の営みや創意工夫、物を無駄にしなかった当時の暮らしの知恵を物語るように、金田商店街は「奉仕市」や「ガラクタ市」の発祥の地として、今日まで伝えられています。



初代桑野武平氏が明治44年の敷島座に続いて大正9年に新築した大和館。活動写真(無声映画)が上映され、当初は弁士という専門家が映画を解説。映像と客席との間に生き生きとした空間が存在した。

●interview

金田に来た時、あまりのにぎやかさに気後れました。炭鉱景気で人が道にあふれ、外に出られない時もあったほどです。店頭で戸板を置いて商品を並べると瞬く間に完売。忙しかったけど楽しい時代でした。



ゆうき衣料品店 結城千秋さん (金田敷島町)

金田商店街誕生の礎

駅と鉄道の歩み
---------

直方—金田間に続き、明治32年には金田—伊田間に鉄道が開通。最盛期には石炭を積載した50両もの貨物列車が通過し、金田の沿線は特異な風景を見せました。そんな鉄道もエネルギー革命による石炭産業の崩壊と家用車の普及とともに、昭和30年代から衰退の一途をたどりま



当時、日常の風景だった「黒い鉄の壁」のように連なる貨車の姿も、今は見る事ができない。

# 金田銀座と 呼ばれた街

興起 街が産声を上げた時

### 風呂敷包みひとつで

金田駅の表玄関として本町筋に沿うように東西へ延びていった金田商店街。田川地区初の鉄道開通と空前の炭鉱景気、のどかな田園風景は、瞬く間に物流の一大供給地へと姿を変えていきました。この明治26年2月の金田駅開業によって、地元の炭鉱景気は急上昇。炭鉱資材の積み卸し、石炭の積み込みをはじめ

め、坑内員の生活を満たすための需要が急増し、金田駅付近には大量輸送に対応するための倉庫が立ち並びました。今から110年ほど昔、明治30年ごろの金田駅周辺には、一軒、また一軒と商店が軒を連ね、やがて筑豊屈指の商店街が姿を現していきます。大分方面からは海産物、広島・京都方面からは呉服類、筑後方面からは米や酒などを携えた多くの商人が、風呂敷包みひとつ

ここで生きていこうと店を構えた。何もなかった場所に街が生まれた。物流・経済の中心地となった金田。物が流れ人々が行き交う商店街は想像以上の活気に満ちていた。

で金田に集まりました。ここで、創業者たちの多くは、足を棒にしながらい行商をし、財を蓄え、未来への望みをかけて店舗を構えたといえます。

炭鉱に携わる人たちが買い物客が足早に行き交う活気に満ちた金田。そのにぎわいは、商いをする人にとって何物にも勝る魅力で、当時の金田は伊田や後藤寺をはるかに凌ぐ将来性を備えた街として「金田銀座」と呼ばれました。



明治40年代、出炭量の増加により、主要線路から多くの支線が引かれた。三菱方城、明治赤池、豊國糸田、大熊金田、黒尾金谷などの炭鉱、そして駅とともに、商店街は繁栄と拡張を重ねていく。